

千葉県郷土史：近現代史の一断面：幕末から開明期における 佐倉藩士と洋学「西国の心学、心理学」との接点

—西村茂樹・津田仙略伝—

西川 泰夫*¹

A local history of Chiba prefecture: a cross section of the modern times: A common ground between the samurai of the Sakura clan and the western scholarship, mental philosophy and psychology, at the time of the last days of the Tokugawa Shogunate and the beginning of the new Meiji era.

—A simplified personal history of Shigeki Nishimura and Sen Tsuda—

Yasuo NISHIKAWA

ABSTRACT

In this paper, the background processes of the acceptance and fixation of modern psychology into Japan was discussed from various viewpoints as follows;

1. The origin of the scientific name, "Shinrigaku" in Japanese: Dose Shinrigaku come from mental philosophy or psychology? By whom these words translated into Japanese? These were largely come from Amane Nishi.
2. Who brought modern western psychology to Japan?
3. There arises a hypothesis that Shinrigaku is synonym for Seirigaku in Japanese.
4. To test the hypothesis, it was very effective the book titled "Shingakukogi" written by Shigeki Nishimura and also his lecture titled "Seizensetsu" which means the view humans are born good. And it was well known that Nishimura was an intimate friendship with Amane Nishi.
5. A human relations between the samurais of Sakura Clan Shigeki Nishimura, and Sen Tsuda at the last days of the Tokugawa Shogunate and the beginning of new Meiji era. And also another human relations between Joh Nijima, Sen Tsuda, and Yujiro Motora.
6. However, there are left unsolved many kinds of issues needing further research.

要 旨

本論では、「心理学」という学問が、わが国に移入され定着するに至る背景やことの経緯を当時の人物の交流関係から再検証するとともに、なお未解決の論点をあらたな資料を基に再検討した。しかしなお、今後多くの論点が残る。

心理学（新心理学）の導入と定着に日本初の役割を担ったのは、元良勇次郎である。その彼がアメリカ留学に至る間の経緯は、新島襄と津田仙との深い交友関係による直接、間接のつながりに支えられていた。この件を再検証する。

一方、そもそもの「心理学」と言う名称の由来やその語源（原語）に関する論点もなお未解決である。「心理学」という日本語表記と「psychology」という英語表記との結びつきはいかに確立したのか。この件の発端には、西周の

*¹ 放送大学教授（「発達と教育」専攻）（2009年4月1日より、「心理と教育」コースへ名称変更）

大きな関与がある。彼は、ヘーヴンの著作「精神哲学（メンタル・フィロソフィー）」を訳出して「心理学」と題して出版した。他方、西は自著や他の訳書では一貫して、「サイコロジー」に対して「性理学」と訳出していて、心理学とサイコロジーとを直接結びつけてはいない。しかし、性と心は同義語と想定することも可能である。この仮説の再検証に当たっては、西村茂樹の著作や講演内容がヒントとなることが分かった。西村は当時、文部省で編纂課長を務める傍ら、大学に「聖学科」を置くというアイデアを提唱してもいた。また、「性善説」と題する講演で、この「性」という用語の定義内容を確定するために、これを「心」と読み替えて行くと述べている。さらに、彼の著作「心学講義」では、彼の言う「西国の心学」とは「心理学」に他ならないという主張を展開している。こうした見解をもとにあらためて「心理学」という名称の由来と当時の「心理学」の制度的位置づけを検討した。

なお、西村茂樹と津田仙は、幕末の佐倉藩士という共通の出自をもつ。彼らの略伝を示し「心理学」のルーツをめぐる議論に重ね彼らにまつわる広い人脉ならびに相互関係への言及を試みた。千葉県郷土史、近現代史の一断面である。

はじめに（問題の所在）

現在、「心理学」という学問があることを知らない人はないであろう。また、それがなにをする学問であるかについて、何ほどかの理解をもつに違いない。あいにく、理解とはいえないまでも想像することはできよう。時によっては、現代社会においてその果たしている多面的な役割などに多くの理解をもつに至ってもいよう。また、生じた事態によっては、重要なよりどころとして求めるところは大きいともいえよう。心理学は、いまや社会現象とさえ言える。

しかし、今あるような心理学がなぜそのようなものか、この学問の成り立ちからその基本的性格、ものの見方考え方など、その変遷と経緯を科学的に考究する学問自体を問う学史、心理学史についての深い理解にまで至っているものは決して多くはない。せいぜいよくとも日常言語の持つ語感や常識、直感的な理解にとどまる。心理学の専門家といえども、決して多くを知らないといって過言ではない。そもそも、心理学史の専門家自体がごく限られた数しか存在しないことから言っても明らかである。実際、その専門家を育成するための制度的対応も、ことを具体化するために必要な確定的なカリキュラムも未整備である。その専門家といえども、現状、本人の自己申告によってそうであることになっているに過ぎない。

ことは悪循環といってよい。心理学史の専門家がいないことによる学びの機会のないことは、必然的に心理学史の存在をはじめ専門家の必要性に対する認識を欠く。一方、心理学史の学び手、当該学問の受け手不足、ないし不在は、専門家の育成の機会を奪う。

心理学者を束ねる組織、学会、日本心理学会などにおいてもこの一端は明白である。

各自の専門分野を表すキーワードとして、伝統的な分野を示す個別名称についての共通の認識は確定している。それに応じた専門区分（第Ⅰ部門から第Ⅴ部門）に各自は属するが、これまでに第Ⅴ部門（方法・原理）とよぶ枠は設定されていたが、その中に歴史（心理学史）という専門分野はない。ようやく最近になって歴史の名称が組み込まれた。筆者によるある年の心理学

会総会での発言がきっかけであった。しかし、研究者にとって重要な競争的資金源である科学研究費の申請枠には、心理学はあるものの下位区分としての心理学史の区分はない。このことは、学問界全体での認識もその程度であることを示す。反省的というなら、学問としての成熟度を見ると、当該学問史を欠く学問は、未成熟といわざるを得ないのである。

一方、心理学を学んだという公的な認定資格として、専門学科を卒業したという証（卒業証明書）だけでなく、「認定心理士」という資格があることは周知であろう。この資格は、現状では、(社)日本心理学会に置かれた認定心理士認定協会の審査による認定資格である。多くの大学が、ことに新設の私立大学をはじめ伝統的な大学でも心理学の専門学科などを持たない場合では、大学での学びの中核の一つに心理学を置いてあることの社会的承認を得る上で、また、学生確保に向けた目玉の一つとして、この資格申請要件を満たすため、当該大学での心理学関連科目のカリキュラムを整備することに取り組んでいる。この支援として、認定協会は当該大学の学生からの申請を一括審査できるように、指導的対応と協力も行っている。しかしながら、肝心の協会がモデルとして掲げる当要件の中の基礎科目における主題科目として、「心理学史」は配置されていない。かろうじて、副次主題として、例示されるにとどまる。心理学史の専門家がないというのがその理由であった。学会が当該学問の現状にとどまらず将来に向けた体系的見通しと将来への的確な展望を描くというようなことは、学会の大事な役割であろうと思えるが、現状では専門家がない、という後ろ向きな姿勢にとどまり、学問の基盤を支える学問史への関心がないということは、残念なことである。明らかに、学問の存立と生き残りにとって危機とも言うてよい。

さらに、研究者の使命が最先端の研究活動とそれに付随する論文を書くという作業に眼が向きがちなことには否めない。それなりの立場に着くには、論文の数などがものを言う。こうした雰囲気からは、学問の過去などにかかずらっているのは、研究者としての使命を終えた老後の楽しみという認識でしかないとも言える。心理学史への当然の関心などは生まれようもないであろう。

こうした事態を打開するためには、早急に、心理学

史という分野を科学的に確立することである。

ではどうすべきか。問題のあることだけの指摘などでは事態はなんら解消しない。悪くすると繰言、あるいは単なる不満の表明という認識しか生まない。新たな事態への前向きな取り組みに、肝心の該当者が後ろ向きではことを悪くするだけである。

まずは実行あるのみである。その昔、心理学を立ち上げるのに取り組んだ先立たちがそうであったように、その存在を受け入れられるような具体的な実践行動とそれにとまなう成果を挙げることである。

実際、返りて見るなら、筆者が心理学を学ぶと口にした際の（50年以上前のこと）、当時の大人（それが親であっても）の自然な反応を見てみればよい。

今となっては幸せなことに、心理学を学ぶことに抵抗する大人はないに違いない。それどころかごく自然に受け止め、受け入れてくれたことであろう。もっとも、その昔の大人の心配どおり、「心理学、なにそれ?」、「そんなことしてどうやって飯を食うのか」、今もって明確な答えと実践結果は上がっていない。とはいえ、「心理学、なにそれ?」へのそれなりの答えは手の届きそうなどころにあることを明言する。筆者なりのささやかな試みも預かって有効に機能したに違いないと自負する。世の心理学への違和感を払拭するのに貢献したものといえよう。しかし、あいにくなことに、飯の種という点では問題解決にはほど遠い。はじめて世界に心理学者が誕生して以来、その当時ですら、まともに職場はなかった。それ以来の伝統的な重要問題である。幸いなことに、現在では、大学教員であることは、その答えのひとつになる。そうであればこそ、その場を確保するための競争は激烈である。先の論点に重ねるなら、「publish or perish」ということである（論文か、さもなければ死を）。目先の業績にとらわれ、過去をきちんと振り返ることはかなわないというのが、現状か。

他方では、心理学を基盤とする公的な資格が、これに代わる役割を担う。したがって、多くが資格取得を望むのは理の当然である。心理学を学んだということによる共通の資格が、職場の確保、ひいては食べられるという大事な論点への解決の一つとなりうるからである。もちろんいうまでもないが、心理学は資格のためにあるのではない。資格に見合う、心理学への見識と実践力が問われることを肝に銘じてほしい。それにまつわる、さまざまな基本的なりテラシーの用意もいる。

以上、現在の心理学が抱える論点の一端をかいつまんで指摘した。

しかし、いずれにせよ、こうした論点を抜本的に解消するための、有効な手段は、一つにとどまらないであろう。あげられた論点一つ一つを、きめ細かに分析し、その問題解決にいかに取り組むか、客観的、かつ科学的な取り組みが欠かせない。そうした中において、繰り返すなら、学問の基盤を明らかにし、その現状への道程を的確に捉えることこそ、つまり、歴史的視点

を基にした取り組みこそ、遠回りのようでありながら、最善の方法となろう。

筆者はこれまでに機会を捉えては、「今あるような心理学は、なぜそのようにあるのか」という問を立て、その回答を尋ねて論及や考察を試みてきている（例えば、西川、2005、）。さらに、心理学史の学問的基盤を確立するために、科学研究費の獲得を目指し、研究組織を立ち上げることも試みた。幸い採用され、これらの研究成果の報告も行っている（例えば、西川、2001a、2006、など）。

その成果の一端は、放送大学放送講義としての開設科目「心理学史」にも反映されていることを記す（西川・高砂、2005）。

他方、こうした機会に結集した研究仲間とともに、新たに「心理学史・心理学論」誌を立ち上げ、この分野の専門的研究の成果を公表する機関誌の発刊を試み、幸い、現在に至る間、10年を経過する。

年間1巻のペースで、途中合併号という事態もあったが、2008年には、10周年目に入りその記念号を発刊の予定である。また、日本心理学会分科会として、「心理学史研究会」も継続されそれ相当の経過を経ている。

ところで、心理学史の研究において、こうした試みは当初、しかるべき資料の入手でつまづいていた。あいにく国内では、貴重な資料の類が、消失しかけている。あるいは、古文書の類は、高値を呼び一研究者の対応範囲を大きく越えている。この点で、また別途提案していることであるが（例えば、西川、1997）、こうした史資料の保管・管理・活用を可能にする、アーカイブズの設置と整備が欠かせない。わが国固有のアーカイブズの設置が望まれる。この点では、心理学関係は、世界規模で言っても知られる限り4箇所に限定され（ドイツのパスサオ大学、オランダのフローニンゲン大学、イギリスの心理学会）、アメリカ頼みの現状である（アクロン大学アメリカ心理学史アーカイブズが最大規模を誇る）。

したがって、こうした場所などでの史資料の調査収集にとまなうて、また国内での未発掘の資料の発見にとまなうて、当初の限定されていた資料による論旨展開を修正する必要があるに生ずる。この点で、心理学の立ち上がりの時点での状況把握は時間経過とともにいろいろな修正を要する事態となっている。

本論では、その一端を取り上げあらためて紹介する。

合わせて本論旨からはそれるが、当時の時代を背景とした人物交流と、そうした先達たちが意図せず、現在の心理学史の議論、ことにことのはじめに関わる論点に大きな足跡を残していることを記す。現在の心理学の基本性格をも左右しえた点など、歴史上のもし、という例えではないが、心理学史を捉える上で、貴重な視座を与えてくれる。

加えて、さらに論旨はそれるが、わが千葉県人（実は筆者も千葉県人!）、なかならず当時の佐倉藩主や

藩士たちが果たすことになった大きな役割の一端を紹介することは、単に郷士の紹介という県自慢という域を超え、学問史の上で果たした意義の大きいことを強調する。また、当時の人物たちの交流関係自体も興味深い。そこには歴史上の人物として名高い人々も今となっては無名の人々も多数登場し、意外な関係など学問を離れても興味が尽きない。

以上の論点からすると、本論のキーワードとしていくつかを列挙すると、以下のようになる。

幕末から開明期においてところと時をえて、しかるべき役割を必然的に担うにいたった人々、藩士、中でも当時の蘭学から洋（英）学への取り組みを志した人々がいる。もちろんそれを指導したいわゆる開明派とよばれた藩主たちを忘れてはいけない。

さらには、その直接・間接のきっかけを作った当時の日本を取り巻く世界情勢、日本に開国を迫る直接の使命を担った人々の到来（ペリーやハリス）と、それを可能にした当時の西洋科学技術に目覚めたこと（4隻の蒸気船、大砲などの武器）。その防備に備えるにとどまらず、自ら打って出て西洋に学ぶ姿勢。ついては、英語の習得。このさいの学びの機会となる英語塾を開設した人物たち。そもそもの藩校以降の、その先には各種の私塾、私教育機関にとどまらず、政府主導の教育機関、制度の整備、文部省の設置から、大学の開設など（表1、参照）。こうした制度化をはじめ、西洋事情を知るうえでの見聞、留学（私費、公費、ないしは、密出国、漂流など）は言うまでもないが、外国書籍とその訳書なども、共通のキーワードとして重要な位置を占める。

以上のキーワードを踏まえ、千葉県人、なかんづく当時の郷士たちとでもいべき藩主とそのもとにあった藩士の中から特定の地域とそこでの人物伝を記す試みを行うことにする。もちろん、すでに多くの著作、研究書のあることを承知しているので（例えば、高橋、1987、高橋、2008、山崎、1962、など）、それらに委ねることで、筆者の基本的な意を十二分に尽くすのであるが、あえて、筆者なりの取り組みを試みるのは、その論点の違いにある。

上で、心理学という学問へなにほどかの言及を行ったが、そのことの発端になにがあったのか、なおなぞは尽きない。その論点の解消と、ひとつの視座を呈示し、心理学史への科学的論及の可能性を探ることを試みる。

この点を十分理解いただくために、では何うが、「心理学」という学問の名称は、現在「心理学」であることに何の違和感もないに違いない。それでは、その名称の由来、語源を始め、そう訳出した人物を承知であろうか。また、これを英語表記すると、「psychology」と書くことも当然であろうが、果たして当然か。

こういった当たり前のことに対してさえ、今なお、確定した回答はない、といったらどう思われるか。驚いた程度の大きさに応じて、あいにくであるが心理学

という学問の基盤、基本性格を何ら承知されていないことが顕になるのだ。

学名が「性理学」であつたら、あなたは、この科目を受講し、あるいはこの道の専門家となろうと志すであろうか。あなたが、字面でことを判断するとは思わないが。それはさておきにせよ、今あるような、社会的ブームを引き起こしたのだろうか。また、英語表記に際して「mental philosophy」としなければならないとしたら、どうであろうか。この英語名を素直に訳出すると、「精神哲学」となるが。

このあたりの事情をめぐっては、筆者をはじめ、多くの研究者がさまざまな論考を公表しているので参照のこと（例えば、西川、1995a、b、1998、2001a、b、Nishikawa、2005、佐藤・溝口、1997、など）。

このことは、ようやく心理学会の仲間にも広く浸透し周知されてきていることである。一方、放送大学の「心理学史」受講者は、筆者自らなどによって繰り返しこの点への言及を試みているので、覚えていることであろう。

おさらいを兼ねて、この点から、以下に本論の基本的趣旨である論及に入ろう。もちろんことの詳細は、それぞれの公表されている研究成果を始め、当事者の略年譜などは別途に参照のこと（表2、3）。以下は、その概要にとどめる。

I. 「心理学」という学名の由来、その語源と訳出者

英語表記である「psychology」に対して一貫して「性理学」の訳語を与えていたのは、西周であつた。彼の自著（例えば、致知啓蒙）をはじめ、彼の訳書（利学）においても、また幕府派遣によるオランダ留学（津田真道らとともにオランダのライデン大学フィセリング教授のもとで学ぶ）の帰国後、明治政府に出仕（兵部省）した傍ら開設した彼の私塾「育英舎」での講義、「百学連環」の記録（大久保、1981）でもそうであつた。

その西が、明治8年から9年にかけて、訳書を文部省より出版した。その本のタイトルこそ、「心理学」（和装、3冊）であつた。ところで、その原著であるが、それは、ジョセフ・ヘーヴン（約瑟・奚般、Haven, Joseph）の著わした「Mental philosophy, including the intellect, sensibilities, and will, 1857」（精神哲学、智・情・意）であつた。

この本は、明治11-12年には、「奚般氏著 心理学」上下2冊本として同じく文部省印行として、再度出版されている。その後も、2、3の出版社より、復刻版が出版されている。当時、相当幅広く読まれたものと想定される。とはいえ、なぜこの著作が広く読まれたかについて、その当時の事情をはじめ、現在十分わかってはいない。なぞのままである。この本自体は、修身学、ないし道徳学、倫理学、そしてこれらを包括した哲学の本というべきものといえよう。

表1 教育制度小史（なお、表中のMは明治を表わす）

1868(M1)年6月	医学所（西洋医学所）、昌平学校（昌平坂学問所）を復興。 同年9月 開成所（洋学研究の主要機関）を復興。 これらのうち、昌平校をもって、開成所、医学所を管轄。
1869(M2)年6月	昌平学校を大学校と改称。 同年12月 大学校を大学と改称。 これにともない、開成所を大学南校、医学所を大学東校と改称。
1870(M3)年2月	大学規則及び中小学規則発布（ただし、実施には至らず）。
1871(M4)年7月	大学を廃し文部省を設置。 これにより、大学南校は南校、大学東校は、東校に改称。おのおのは独立する。 さらに学制改革のため、両校を一時廃校とする。
同年10月	南校再開。
1872(M5)年8月	学制の公布。 南校を、第一大学区東京第一番中学、東校を第一大学区医学校と改称。
1873(M6)年4月	第一大学区東京第一番中学を開成学校、第一大学区医学校を医学校と改称。 学制二編追加。専門学校の規程を定める。
1874(M7)年5月	開成学校を東京開成学校、医学校を東京医学校と改称。
同年9月	学科課程を規程。
1876(M9)年7月	学科目改正。
1877(M10)年4月	東京大学開設。 東京開成学校及び東京医学校を合併して東京大学と命名。 法・理・文（4年課程）、医（医学科は5年課程、製薬学科は3年課程）の4学部制とした。
1879(M12)年9月	学制を廃止し教育令を制定。
1886(M19)年3月	帝国大学令発布。 東京大学は、工部大学校を合併して帝国大学と改称。
1897(M30)年6月	帝国大学を東京帝国大学と改称。 京都帝国大学開設に伴う措置。

ところで、この本が、もともと直訳するなら「精神（ないし、心理）哲学」となるのに対して、「心理学」というタイトルで、訳出出版されたことより、明らかにこの本こそ「心理学」と言う名称の由来とその語源となるといってよいのであろうか。しかし、そうであるにせよ、現在われわれにとってなじみの名称である「心理学」の英語表記として当然の結びつきとなっている「psychology」ではないこともその書名（mental philosophy、精神（あるいは、心理）哲学）からみて確かである。

繰り返すと、西周は、一貫して「psychology」に対して、「性理学」を当てていたことから明らかである。

では、いつ、いかなる経緯で、また誰の手で、「psychology」と「心理学」が結びついたのであろうか。この結びつきに対して現在誰も異を挟まないが、これ自体がまだ解けていないなどであることを指摘する。これに対して筆者なりにある仮説をもつが、この点は以下に触れる。そのいささか詳細な検討を以下で試みるが、今の段階でこの点に触れておくと、訳者の西周も承諾すると想定するが、「性」と「心」は、同義語というものである（この件は、他に例えば、西川、1995b、1998、Nishikawa、2005、などを参照）。

ところで、ヘーヴンの著書を訳出した、西周は、訳書冒頭の「緒言」ページと続くページに渡って上段欄外に以下のような注記を記している。

「メンタル・フィロソフィー、爰に心理上の哲学と翻し、約めて、心理学と訳す、この学如何を論ず」というわけで、この書名から「心理学」と訳出され

たことが明らかになる。

しかし、この「心理学」という名称と「psychology」という英語表記との結びつきが確定していく経緯は、現在に至るまで相変わらず不明といってよい。今となつては全く当たり前のように見なされている。辞書にもそう記載されていることに疑問もないといえよう。そして、「性理学」が用いられなくなってしまう経緯も同じく不明である。

以上の事柄に対する直接の回答になるのか、現状ではなお不明であるが、当時別途の試みがあったことは確かである。その一端を記し、その間の関係を推測することにしたい。それは以下のようなものである。

Ⅱ. 西村茂樹、西周、そして津田仙

この西村茂樹（1828-1902、略年譜は、表2、を参照）と西周（1829-1897）の生存年（西周の略年譜は、例えば、西川・高砂、2005、p.24、表1-2、などを参照のこと）を見ると明らかのように、両者は、西村の方が1年年長でやや長命であったが、全く同時代人といってよい。

江戸幕末から、明治新政府のもとで文明開化（西洋化）の激動の時代に生きたのみならず、それぞれの担った役割を通して、時代を新たに背負いことの達成に大きな足跡を残したといえよう。もちろん、両者は、同郷人ではない。西村が佐倉藩士（現、千葉県佐倉市）であるのに対して、西は、津和野藩士（脱藩し上京）（現、島根県津和野町）であつて、距離的には全く離れている。

表2 西村茂樹略年譜、および時代の変遷小史。(なお、表中のMは明治を表わす)

	佐倉藩主：堀田正睦（ほったまさよし：正篤、1810-1864）の時代 後堀田時代（延享3年以降）（木村礎（1989、P.452-474、より引用）、および高橋（1987）を参照）
	藩士（家老）：西村茂樹略年譜、および時代変遷小史：西村平太郎（鼎、のち茂樹）（1828-1902）。佐倉藩側用人。年寄役、大参事、400石取り。嘉永～慶応・明治初期。藩内開明波リーダーとして活躍。明治に入って明六社に参加。文部省に入る。明治天皇侍講として洋学を進講。「日本道徳論」は著名。宮中顧問官、貴族院議員。
1828(文政11)年	3月11日：江戸辰ノ口佐倉藩邸生まれ：幼名：平太郎、鼎。父：芳郁：通称：平右衛門。
1843年	堀田藩主、蘭法医佐藤泰然（高野長英の高弟）を佐倉に招く。 順天堂医院（現、順天堂医科大学の前身）・私塾を開設。西の緒方洪庵塾と並ぶ塾。
1845(弘化2)年	茂樹佐倉藩主近習となる。
1846(弘化3)年	佐倉藩邸内温故堂正授読
1851(嘉永4)年	高島流砲術委員長 西洋兵学の研究：手塚律蔵とともに佐久間象山の門に入る：洋学を学ぼう勧められる
1861(文久1)年	手塚律蔵門下：又新塾（ゆうしんじゅく）入塾。門下生：西周、神田孝平、木戸孝允、津田仙ら。
1867(慶応3)年	大政奉還。
1871(明治4)年	明治政府兵部省出仕招聘：辞退：西周の尽力：印旛県権参事に任命：翌年、依頼免官
1874(M6)年	明六社設立に奔走：森有礼の発案、横山孫一郎の仲介。 社長：森有礼（福沢辞退のため） 会員：福沢諭吉、森有礼、西周、中村正直、加藤弘之、津田真道、箕作秋坪、杉亭二、箕作麟祥、
同年	文部省出仕：編書課長に任ぜらる。森有礼の推挙。学制の施行にともなう、中小学校の各種教科書の編纂。M10まで継続。 大学における教授を日本語でできるよう、適当な書を作成すること。 反訳課課長：河津裕之。 洋学者を課員として教育用の西洋の書物を翻訳。訳文の校正。
1879(M12)年	東京学士会院の会員となる。 文部大輔田中不二麻呂考案：1878(M11)年：文部卿西郷従道、実現する。 会員：西周、加藤弘之、神田孝平、津田真道、中村正直、福沢諭吉、箕作秋坪。 かつての明六社会員がそのまま移行した感がある。「聖学科」設置の説、講演。聖学とは、儒学と西洋哲学をあわせたもの。設置5科のうち、修身・性理をもって政事・理財・交際の3科の基礎とする。 「性」＝「心」と置き換える：その構成要素は、智・情・意：これらを統括する良心。
1880(M13)年	文部省改革：編纂局長に再任。
1883(M18)年	心学講義、刊行。

両者を結ぶ直接のきっかけは、明らかに、時代の変化の中において重要なキーワードの一つとなる「洋学」を通じてであろうことは間違いないであろう。両者は、幕末の藩所調所の教員であったことや、当時の洋学である蘭学に代わって英語を習得する必要性から、その習得にさいしての数少ない機会であった手塚律蔵の開設した又新塾で出会ったことに端を発したと想定される。以降さまざまな機会に関係をもったことにあるといえよう。

この前提にあるのが、いうまでもなく日本の世界情勢における状況変化が預かって大きい。激震は、ペリー一行を乗せた4隻の蒸気船の来航であった。この当時の西洋の科学技術の威力を目の当たりにして、その対応に取り組んだことに全ての発端があるといつて過言ではない。

西周も藩命にしたがって、沿岸防備の任を遂行すべく上京し、眼前の4隻の黒船に圧倒されている。そして、洋学を学ぶため、藩に迷惑をかけないように脱藩して江戸にとどまり勉学に取り組んだ。

一方の、西村も、この事態を受け、同じく当時の佐

倉藩主堀田正睦の諮問により、米国の国書に対する意見書、ならびに外国貿易に関する意見書を提出している。これ以前に、すでに西洋砲術を学び免許を得ている。その後には、西洋兵学師範手塚律蔵とともに西洋兵学の研究を命ぜられてもいた。

このペリー来航を受け、さらには海防策一通を草し藩主に示しその意を決したりしている。また、藩主堀田正睦は、当時の幕府老中を務めるなど知られるが、その開明的姿勢を受け、洋学への関心を開いていった。

他方、本論のもう一方の主人公である「津田仙（1837-1908）」について、概要は後述（表3、を参照）するが、この段階で指摘すべき事柄は、西周、西村茂樹と共通する事柄である。西村とは、その後輩に当たるが、同じく佐倉藩士であったことである。そして、このペリー来航の折には、藩命で、当時の佐倉藩領地であった、千葉・寒川の地で（現在の千葉市、本千葉から千葉港、そして登戸界隈であろう）、海岸防備にあたったことが知られている。1857年には、上京し、江戸藩邸の成徳書院で、手塚律蔵から蘭学を、そして

表3 津田仙と元良勇次郎（なお、表中のMは明治を表わす）

	津田仙（1837-1908）の略歴（高橋、2008、など参照）を基本とした元良（杉田）勇次郎との接点。（津田仙、幼名：千弥、後、仙弥、さらに仙）佐倉城内最上町生まれ。父：藩士・小島善右衛門良親（100石取り、中級武士）・母：きよ。3男。破損奉行、勘定頭、小納戸元方、財曹分課司庫局権大属など：管理・会計関係。
1851年	元服：桜井家養子 温故堂（藩立中等学校）入学
1853年	ベリー来航 千葉・寒川、黒船警備
1855年	洋学の学習をめざす。
1856年	小島家に戻る
1857年	江戸へ。藩邸の成徳書院で、手塚律蔵に蘭学を学ぶ。手塚塾：又新堂（ゆうしんどう）でも。手塚塾頭格：西周。中浜万次郎から「初級英文法教科書」を借り、筆写。 仲間に：西村茂樹、木戸孝允、神田孝平、杉亨二（これらは、後明六社社員）。新島襄も一時参加。
1859年	伊藤貫齋に入門
1860年	森山多吉郎に入門 兄弟弟子：福沢諭吉、福地源一郎、尺（せき）振八（共立学舎）など。
1861年	津田家養子：田安家家臣：津田太郎栄七の婿養子。 外国方通弁。 同僚：西周、福沢諭吉、津田真道、杉亨二、尺振八ら。
1863年	聖書の会：新島襄、杉田廉卿、吉田賢輔
1864(元治1)年	2女梅子（むめと命名、梅子と改称したのは、1902年のこと）誕生（仙は、今度は男子と決めていたのに女子であったため、その日は家を飛び出し、帰らなかった。そのため命名されず、枕元にあった盆栽の梅の木にちなんで、むめ、としたという、エピソードが残っている）。
1867年	幕府使節団アメリカ派遣 勘定吟味役：小野友五郎、開成所頭取並：松本寿太夫、調役次席・翻訳御用：福沢諭吉、支配通弁御用出役：津田仙、通弁御用御雇：尺振八
1871(M4)年	岩倉具視（特命全権）大使一行欧米視察に出発。副使に、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文ら、総勢107名。この中に、5人の女子留学生を含む58名が留学生であったということである（山崎、1962）。その一人に、津田梅子がいた。このとき、梅子弱冠満7歳であった。
1874(M6)年	明六社設置（大久保、2007、参照）：明六社雑誌刊行、ならびに演説会：これは日本初の人文諸科学学会。森有礼の提案、人材結集に当たって西村茂樹の奔走。両者を取り持ったのは、横山孫一郎（直接的には、木戸孝允との関係からか？）を仲介として。 設立メンバー：初代社長（福沢辞退）：森有礼（もり ありのり、1847-1889） 当初会員：西村茂樹（にしむら しげき、1828-1902）、箕作秋坪（みつくり しゅうへい、1825-1886）、杉亮二（すぎ こうじ、1828-1917）：統計学の開祖、津田真道（つだ まみち、1829-1903）、西周（にし あまね、1829-1897）、中村正直（なかむら まさなお、1832-1891）：漢学者、福沢諭吉（ふくざわ ゆきち、1834-1901）、加藤弘之（かとう ひろゆき、1836-1916） 箕作麟祥（みつくり りんしょう、1846-1897）：箕作阮甫の孫 後加盟：神田孝平（かんだ たかひら、1830-1898）：経済学、津田仙（つだ せん、1837-1908）：農学、など。
1875(M8)年	学農社設立、学農社農学校開校。1884(M17)年：閉校
1876(M9)年	教員採用：同志社より：中島力造・杉田勇次郎・上野栄三郎
1878(M11)年	耕教学舎設立
1880(M13)年	YMCA(キリスト教青年会)：神田乃武（かんだ ないふ）：「六合雑誌」；YMCA機関誌を発刊；小崎弘道らと。この時代キリスト教界の三傑とされたのは：津田仙、中村正直、新島襄。
1881(M14)年	杉田（元良）勇次郎・和田正幾に経営を依頼：耕教学舎を東京英学校と改称 杉田・元良米子、小崎弘道・岩村千代：合同結婚式：津田仙の媒酌 なお、この小崎は、後同志社総長にも就任している。また、東京港区にある霊南坂教会の開設者としても知られる。
1883(M16)年	東京英学校会社設立。土地買収に取り組む
同年	6月：元良：東京英学校辞任。アメリカ留学：ボストン大学へ。
1885(M18)年	東京英和学校と改称。美会神学校との合併による。現、青山学院大学の前身。 元良、ボストン大学からジョンズ・ホプキンス大学へ。
1888(M21)年	元良帰国。 ジョンズ・ホプキンス大学、ホールのもとで学位取得。
同年	10月：帝国大学で精神物理学を担当。
	元良勇次郎、資料：（東京帝国大学五十年史 上册 P.1295-1296 第5章 文科大学）
1888(M21)年	以降各学科における授業科目の改廃がしばしばなされた、その中の特記事項のみを記す。 M21年10月13日哲学科第2年及び第3年の過程に、「精神物理学」（毎週3時）を加えた。 精神物理学は当時欧米における新興の学科にして本学は、米国においてこれを修めて帰国した元良勇次郎（1858-1912）にその講義を委嘱せるなり。これ、後年における実験心理学の始まりである。
1890(M23)年	M23年10月7日：元良勇次郎教授就任
1893(M26)年	心理学・倫理学・論理学第1講座教授。 同上第2講座教授：中島力造。
1903(M36)年	精神物理学実験場開設

同じ手塚律蔵の又新塾でも洋学の勉学に取り組む。このとき、西周、西村茂樹らを始め本論に頻りに登場する多くの人物と知り合うことになる。

この段階でもう一点指摘すると、「津田梅子」は、彼の2女であることである（彼女は、日本人女子として最初の海外（アメリカ）留学生であることは周知のことであろう。時に、彼女は弱冠満7歳であった。この留学は当時の開拓使庁（津田仙自身も関わっている）が大きく関係していたようである。その後再度の留学の後、華族女学校教授職を辞し、自らの津田英語塾を開設した。この詳細は、例えば、高橋（2008）、山崎（1962）、などを参照。と同時に、津田は、新島襄とはきわめて親しい相互信頼関係から（密出国した彼のアメリカからの文面を安中に住まう両親に届けたり、その逆のルートの仲立ちをするなど）、新島の同志社英学校終了者を受け入れ、彼の開設した「農学社農学校」の教員として招いたのが、中島力造、杉田勇次郎（後の元良勇次郎）、上野栄三郎などである。他に、小崎弘道（後、同志社総長、また、東京港区にある霊南坂教会の開設者）らとも親しい。この農学校は、札幌農学校（現、北海道大学農学部）に先立つものであるが、その後官立（内務省勸業寮）の農事修学場（官立駒場農学校と改称。現、東京大学農学部）の開設などによって閉校した。ここに挙げた人物、中島、元良は、その後東京大学の教授として就任する人物である（講座制が敷かれたさい、心理学・論理学・倫理学第一講座教授が元良で、同第二講座教授が、中島であった）。元良は、日本における新心理学の開設者となる人物である。

津田は、さらに農学校の他に、「耕教学舎」の設立にも関係し、これはその後、「東京英学校」、「東京英和学校（美会神学校と合併による改称）」と名称を変更した。これは、現在の青山学院大学のルーツの一つに当たるものである（小泉、2004、都田、1972、などを参照のこと）。

少し先を急ぎすぎた。元に戻す。西周と西村茂樹の関係である。

両者の間のエピソードとして記録に残ることとしてあげるなら、両者とも、成立した明治新政府からの出仕命令に従って、それぞれに応じるのであるが、西村は、兵部省への出仕要請に対してはかたくなに断り、すでに出仕していた西周の助けによって、拒み通したことが知られている。一方、西村は、文部省への出仕などには応じている。このことが、上に述べた西周の訳書の出版経緯とその後の西村の唱える説や講義に大きな影響を及ぼしたと想定される。以下に西村茂樹に関する事実関係を概略記す（表2、参照のこと）。

1873（明治6）年11月25日：文部省出仕。編書課長に任じられる。

この件は、一方では、森有礼の推挙によるといわれる。

この当時、「学制」の施行（1872（明治5）年）にともない、中小学校用の各種教科書を必要としていた。

そこで文部省は、教科書の編纂作業を急ぎ、西村を編書課長としてこの局面に当たさせた。これを契機として、その後開設された（1877（明治10）年）「東京大学」における各教科の教科書の必要性なども認識したといえよう。この件は、以下に言及する。

なお、ここで追加すると、この1873（明治6）年には、もう一つ大きな事柄があった。

それは、「明六社」の設立である（詳しくは、例えば、大久保、2007、高橋、1987、などを参照）。この件もあらためて言及する。

若干述べると、ことは当時駐米代理公使（米国弁理公使）森有礼（1847-1889）が、1873（明治6）年帰国早々、知人の横山孫一郎を介して、西村茂樹に会ったことがきっかけとなって、西村の奔走もあって設立されたものである。その年号を取って、明六社と名づけたということである。この趣旨は、わが国にはまだない、学者を結集した学術結社（ことに、人文社会科学学会）の設立を図るものであった。機関誌として「明六社雑誌」も発刊された。

その設立に当たったのが、森有礼、西村茂樹のほか、加藤弘之、津田真道、西周、中村正直、箕作秋坪、福沢諭吉、杉亨二、箕作麟祥で、社員と呼ばれた。社長には当初福沢を予定したが、当人が固辞したため、森が就任した。

この時、ウイーン出張中の津田仙も、後に、参加している。

Ⅲ. 西村茂樹の「聖学科設置の説」

西村茂樹の唱えた「説」とは、1879（明治12）年4月の東京学士会院での講演演題に見ることができ。そのタイトルが、「大学の中に聖学の一科を設くべき説」である（この講演記録は、松平編、1894、に収録されている。この件への言及は、高橋、1987、に詳しい。筆者も必要に応じて引用する）。

まずこの大学とは、1877（明治10）年4月に開設した「東京大学」のことである。当時、日本で唯一の高等教育機関であったのは言うまでもない。その前身となる、東京開成学校（幕末の開成所（洋学研究の主要機関）の流れを汲む）、および東京医学校（医学所の流れを汲む医学校を改称）を合併してこう命名された。法・理・文（4年課程）、医（医学科は、5年課程、製薬学科は3年課程）の4学部制とした。この開設に当たっては、総理に就任した加藤弘之の大学というものの基本性格を規定する提言が大きく寄与した。このときの提言先は、森有礼文部大臣であった。

日本人に対して、外国人教師の手で、外国語で講じられた西洋諸学問を学ぶ、この場を（旧制）専門学校（日本人教員養成）というのに対して、学び取った日本人が、改めてことがらを日本語で、日本人学生に教える場こそが、大学である。専門学校においては、講じられる洋学を学ぶために、その準備として決定的に外国語の習得が求められる。いうまでもなく、英語を

主体とする外国語である。かくして英語塾が隆盛を極める。これぞ入学試験対応の塾の起源に他ならない。

では、発足した当時の東京大学は、その趣旨を実際に具現していたのであろうか。相変わらず、横のものを縦にする伝統が一気に打開されたとは言いかねよう。この点は、現状の大学においてもどうであろうか。

これはさておき、当時の大学に対して、当時の文部省編書課長の職にあった西村にとって、どのような問題意識の対象であったのであろうか。

先の講演内容は、こうした事態への彼なりの提言（説）と新たな取り組みを意図したものといっていよう。その趣旨を当時の記録をもとに、おっってみる（松平編、1894、高橋、1987）。

西村の言う、「聖学」とは何であろうか。

その内容を筆者なりに現代語風に直し、記す。西村は、まず講演の冒頭で、

「西洋諸国の大学にはみな神学があるが、わが国の大学にはこの科はない。世の人々、西国の大学に神学のあることを疑わないが、しかしわが国の大学にこの科のないことも確かである。これは、それぞれの国状や人情それぞれ異なることによる。しかし、わが国の大学において全くこの学科を除いて講義することは、学問上に不足があるといわざるを得ない。」と述べ学問全体における神学科の位置づけに論を進める。

引き続いて、「学問には、「有形の理」を講ずるもの、「無形の理」を講ずるものがある。そして、これらがいまって学問の全体が備わることになる。」と進める。

つまり、学問の全体系を構成する基本単位として、「有形の理」、「無形の理」を区分する。

そして、大学（開設された東京大学のこと）における諸学科のうち、法学、理学（物理学をさす）、医学、そして文学などは、「有形の理」を講ずるものである。一方、神学、哲学（原語は、フィロソフィー。この訳語は、東京大学で用いられる用語に従う。）などは、「無形の理」を講ずるものである。つまり、「有形の理」を、人の身体に例えるなら、「無形の理」は、人の精神に例えられる。したがって、この二者は一つのものであって、裂くことはできないものである。

ところで、西国の学問では、「有形の理」を説くことに長じていることは、周知のことである。しかし、この「有形の理」のみならず、「無形の理」においても神学と哲学があり、「神学は上帝の現存を説き、哲学は、宇宙の真理をきわめてその巧妙ことは、決して有形の理に劣るものではない。ことに哲学は、近代に至ってますますその精緻を極め、世の人々の心に大きな感動を引き起こしていることは、哲学研究者の大きな功績といえる」と高らかに、神学と哲学の大きな役割を強調する。

そして、「わが国の大学は設立後日にちもまだたっていない、その責を完全に果たしてはいないが、その力を得るなら、一日も早く完全な学科になるようにする

ことは、私のもっとも希望することである。」と述べる。

なぜなら、「東京大学は、法学、理学、医学、文学の4学科構成であって、神学科は全く置かれていない。しかも哲学は、文学科に属するだけで、その勢力ははなはだ微小である」、という現状認識を表明する。

そして転じて、「西国の大学におけるいわゆる神学には、旧教、新教、ギリシャ教といった区別があるものの、みな耶蘇教（キリスト教）の教えでないものはない。近年、わが国はキリスト教の禁止を緩めたとはいえ、まだこれをもって大学の一科とする勢いには至っていない。しかも、本居、平田諸先輩の唱える神道をもってこれに当てるには浅薄で、大学の学科にするには不足である。

では、どの神学をあてるとしても、どれ一つとして、わが国の学科には適さない。哲学はすでに東京大学の文学科のなかにあるのでこれを別の一科として立て、他の四科と並べて五科とすることが可能であるが、なお足りないものがあると思う」と言う。

その対策として、「切に願うことは、大学の学科の中に、「聖学」の一科を設置することである。」「もちろん、この聖学の名は、西国の学科にはないものであり、今日新たに論ずるものである。」というものである。

そして新たな提案として、この西国の哲学に、わが国の儒学を合わせたものとしての「聖学」を一科として独立させるといふものである。

この一科を構成するものとして、キリスト教（耶蘇教）、仏教、そして回教（イスラム教）をおき、科目構成としては、「修身」（倫理学・道徳学）、「性理」（心理学）、「政事」（政治学・法学）、「理財」（経済学）、そして「交際」（社会学）の5科目をあてている。なおそのさい、修身・性理を他の3科目の基礎にするものとした。

この時代までの西洋における哲学の伝統を入れながらもさらにこれを拡大して、和（日本古来の伝統）を等しく加味し新たな体系化を目指したといえよう。それに当たっては、基本に倫理学・道徳学、そして心理学を基盤に据えたものとなっている。大づかみにいって、道徳学や心理学を基盤として、他の諸学問を統括するという意図があるものといえよう（この件、以下において再度取り上げる）。

また、こうすることによって、西洋の神学に代わってこの聖学科を大学の4科の上に位置づけ法・医・理、3科と合わせるなら、大学の全体が整うという案（説）である。

この背後には、大学における他の3科に比べて文科の弱体ぶりがある、このでこ入れとして、こうした提案がなされたものとも言えよう。さらに言うなら、他の3科が、洋学を主体とするのに対して、一方の伝統的な和学が隅に追いやられているという認識があるのであろうか。そこで、当時の時代精神にも考慮しながらも和洋折衷のバランス感覚のなせることでもあつ

たともいえよう。それにしてもその一方では、西洋の大学では文科をおくことは多くないので、これを省くこともありえるとも言っているのは興味深い。

以上のようなこうした西村の案は、実際に具体化され実現したかということ、そうでなかったとってよい。文科は、その後も紆余曲折を経て現在に至るまで存続し続けてきたとってよい。事実、哲学はいうまでもないだろうが、一方の「性理」、つまり「心理学」（正確には新心理学）が、その基本的な科学的・実験心理学の性格を持ちながら、理学部などではなく文学部に配置されてきたことともつながるであろうか。今後検証すべき筆者の新たな仮説として言及しておく。

なお、西村が、生涯一貫して取り組んだとってよい、彼独自の道徳学、修身学の確立普及活動を見ると、西洋哲学の持つその方法論、真理探究という点で、大いに彼の思索において依拠の対象であったと想像される。では、心理学とはどうつながるのか。

ところで、本論の基本論点に帰るなら、上に上げた「性理」を、当然のように「心理学」と記したことに違和感がなかっただろうか。もちろんすでに、「心理学」が、サイコロジの訳語であったことや、メンタル・フィロソフィー（直訳すると、精神哲学、ないし心理哲学）の訳語が「心理学」であったことは、それに係わった人物とともに冒頭の議論で紹介済みであったので、このことを覚えておられるなら自然と受けとめたことであろう。

しかし、では、西村自身は当時、このことについてはどこまで共通の認識があったのであろうか、これはこれで別の問題であろう。いろいろな仮説が浮かぶ。その検証が待たれる。

なによりこれも上で指摘しことであるが、西村茂樹と西周の間の親密な関係である。お互いの仕事を十二分に承知しあう関係に鍵があると推定される。また一方、西村自身が西周とは独立に、すでに承知していたヘーヴンの著作の訳出を試みていたかもしれない。その上で西にその仕事を依頼したかもしれない。

最もこの可能性は、筆者が言い出してすぐに否定するものなのであるが、少ないであろう。なぜなら、記録によれば、西がヘーヴンの著書に触れこれを訳出し始めたのは、1870（明治3）年に遡る（大久保編、1981）。この時点では西村についてそうした記録はないとってよい。そして、西の訳書「心理学」（和装3冊版）が最初に文部省から出版されたのは、1875、1876（明治8、9）年である。その後、1878、1879（明治11、12）年には、2冊版が、同じく文部省（この時は、「奚般氏著 心理学 文部省印行」、と記されている）より出版されている。

ところで、これも上に触れたが、西村が、文部省の編書課長に就任し、小中高のみならず、大学の教科書の編纂に当たったのは、明治6年であるので、両者の間に何らかの接点が生まれた可能性は残る。なぜなら文部省は率先して洋書を翻訳することを当時の識者に依頼したことが知られるからである。すぐ上で否定し

たことを改めて肯定することになるが、ヘーヴンの本を介した両者の深い関係が想定できる。

一方、1872（明治5）年の大学南校（開成所（洋学研究主要機関）を改称したもの）をさらに改称した第一学区東京第一番中学（これは、翌年、開成学校、1874（明治7）年には、東京開成学校と改称される。後、東京医科学学校と合併し、東京大学となる）の中の上等中学で用いられた教科書リストの中に、「ヘーヴン氏修身学」という注目すべき記載がある。

この教科書は、後、西の訳出した「心理学」と同じものだろうか。また、この科目の担当者として、外国人お雇い教師として、サイル（E. W. Syle、雇入年月明治7年11月、解雇年月明治12年4月）の名を見いだすことができる。このサイルは、1877（明治10）年に開設された東京大学の文学部教員リストに、「史学及び道義学」担当教授として記録されている（西川・高砂、2005、など参照）。また、教育制度小史は、**表1**、を参照。一方、このときの「心理学」担当者としては、英語担当と併記されているが、教授外山正一であった。

それにしても、ヘーヴンの本がどうして当時話題の本であったのか、これも明らかになっていないことを強調しよう。

いろいろと関係する事項が続出するが、ここまでにして本論に戻す。

ところで、西村の、冒頭指摘したこの講演会は、明治12年のことである。すると、西の仕事について、むしろ西村が言及してもおかしくないが、講演記録の中には筆者の見落とししてないとすると、見いだせない。わざわざ言及するまでもなくもう当然のことになっていたのだろうか。というより、西とは独立にこの本の存在を知っていて、また訳出しないまでも、個人的には読了していたのであろうか。

こうしたなぞというべきか疑問を解く鍵は、あらためて西周が一貫してサイコロジを「性理学」としていたこと、また同じ西がヘーヴンの著「精神哲学（メンタル・フィロソフィー）」を「心理学」と題して出版したこと、そして西村の講演記録に見られるように、「性理」、すなわち「心理学」という言及などに接点があるといえよう。

この点をいささか究明する上で有効であろうもう一点を以下に加えておく。

IV. 西村茂樹の「性善説」

それは、西村の「性善説」と題する、同じく東京学士会院（現在の、学士院の前身）での講演（1880（明治13）年4月）（松平編、1894）の内容である。

現在われわれは、人の本性に対して生来「性善」、あるいは生来「性悪」などといいどちらが妥当であるのか、さまざまな局面でその良し悪しがよく論争になる。こうした論争に決着を付けるためには、そもそもこれらの表記にある「性」をいかに理解したらよいの

か、それが問題だと指摘する。

西村は、上の講演で、この「性」という用語をめぐるまずなすべきことは、その概念規定、定義をきちんと定めるべきであるとし、自らもその一つの試みを行うことであった。

そのためには、「性」を構成する要素に分析する分析法が問題となることを指摘する。そのさいの分析法は、米や麦といった穀物を小刀で分割したり石臼にかけて粉にしても、ものを細分しただけで、その成分（性分）を知ることはできないという。そうではなく、「化学の術」を用いることが必要と説く。この分析によって、成分（性分）にまで分解することが可能になる、というのである。

しかし問題の「性」を分析にかけるにせよ、これまで定義に関する議論は異論噴出で、確たる結果が得られていない。そこで「性」に代わって、万人が承知する「心」というものとしてこれを分析するにせず、という主張を展開する。

ここに、「性」と「心」とが重なる。同義のものとなったとってよいだろう。

それが証拠に、西村自身も、さらに論を進め、「性」と「心」とはまったく別種のものにあらざる」と述べることから明らかである。

さらに続け、「心」の分析に関しては、より一日の長のある西国の「心学の説」によるなら、「心」の概要、その構成成分は以下の通りであるという。

「智（インテレクト）、情（フィーリング）、意（ウイユ）の三者から構成される」という。

ここまでくると、この「心」、つまり「性」は、同一の概念であるという、定義、概念規定からいって、西村の論及は、ヘーヴンの著書「精神哲学」のタイトルそのものに重なると見るのが自然である。

かくして、「心理学」という学名は、メンタル・フィロソフィー転じて、サイコロジーと重なるといえよう。

なお、西村は、さらに論を進めて、この心の成分として、「良心」をあげる。これは前三者が、良し悪し、上下などはなく、中性とするにせよ、良心こそ、この善悪、正邪などに関して三能を制御する力を有するので、それが邪道に立ち入らないように務める、という。この件は、西村がもっとも取り組んだ、彼の道徳学や修身・倫理に関する和洋の伝統を踏まえ統一的な学問の確立に向けての議論といえよう。

以上で、西村の「性善説」をめぐる議論を打ち切る。

それにしても、西村は、こうした記録を見る限り、ヘーヴンへの言及を始め、西周の行ったヘーヴンの著作を訳出した「心理学」への言及はないといってよい。ここからいうなら、ヘーヴンの著作をめぐる西と西村との関係については、あいにくであるが明らかではない。

以下にもう一点、西村の著作「心学講義」を見ておこう。

V. 西村茂樹の著作「心学講義」

上の論点を解く鍵の一つとして、西村の著作「心学講義」（物外廬蔵版、1885（明治18）年）に求めることができよう。その「心学講義序」、ならびに「心学講義第一冊 緒言」に重要なヒントとなる記述がある。

この彼の著作は、そもそもは、日本講道会での会員への講義原稿を基にしたものである。

では、ここで彼のいう「心学」とは何かというと、「序」の冒頭で、「本邦にて言うところの「心学」道話にもあらず、今世間で称するところの「心理学」というものである。」と述べる。この点は、すでに上で紹介してきた西村の見解と一貫している。

そして、「緒言」の同じく冒頭で、「心理学を心学と唱え替へたるかというに別段深き意味あるにあらず。」、いささか拍子抜けする文言が続く。

しかし、その論を追っていくと、重要な言及に出会う。

すでに「聖学科」設置の主張にもあったことであるが、その主張をより鮮明にする。個人から国家に至る物事の根本にあるのは、いずれも「心」である。したがって、「法律学、経済学、修身学、政治学というも、心の学を知らずしては、根のない樹木にも相当するし、また水源を欠く川の流れるごときものである」、と述べる。さらには、「最近に至っては、ようやく学問の一科となった教育学なども、心学がその原資となる」、ともいう。

これに加えて、「数学、化学、格物学（物理学）、博物学、生器学（生理学）、の類も、心学（心理学）の大意を知らなければこれに通じることが叶わない」ともいう。

いうなら、心理（学）（至上）主義とでも言うような主張である。ここまでいわれると、現役の心理学者として、筆者にはまことに面映いしだいである。

西村は、さらに一步を進める。「心学」に対して彼の抱く目的は、「独立の心学」であることである。そのためには、日本古来の伝統を踏まえてというより、遠い西国の心学を取るものであると、宣言する。

もっとも「独立の心学」、つまり「文学部心理学科」といったものではなかった。「心理学部」（2000年に、中京大学に設置された）や「大学院心理学研究科」という独立の専門単位が大学制度の中で確立するのはごく最近になってようやく実現したことである。しかし、心理学を学んだことで取得可能な国家資格の制度の確立にはなお遠い状況にあるといわざるを得ない。

これはさておくが一方、西村は、西国の心学の基本的性格や歴史的展開を概略記し、これを「サイコロジー」とよぶに至る経緯を紹介する。あいにく、このカタカナ表記に対して、彼は「心理学」と明記はしていない。しかし、上の記述からすると、西国の心学を「心理学」のことであると述べているので、「サイコロジー」を「心理学」と対応付けて間違いなであろう。

そして、この「サイコロジー」を区分して、「実験」（自然科学における実験と同様のもの）と「推理」（心の本態本質及びその霊能を論ずるもの）の2種のあることを述べる。また、「実験のサイコロジー」は、またこれを「後天の心学」と名づけ、「推理のサイコロジー（以下心象学と訳す、と西村は記す）」は、「先天の心学」と名づける、という記述に行き当たる。この点では、彼が言う心理学は、西国における従来の哲学的・道徳学的・倫理的・宗教学的の心理学ではなく、明らかに、それらから独立した「新心理学」、つまり、当時ドイツに興隆した自然科学、中でも生理学や物理学をお手本とした科学的・実験心理学を指すといっただろう。この点では、西村の言う、独立の心学という理念は、その第一歩として当時の最新の科学的・実験心理学を想定していたとみてよいであろう。このことは彼の実験サイコロジーという表現に見ることができよう。さらに、繰り返して「心を知る」学と「心を治める」学に区分し、「心を治める」ためにはまず「心を知る」ことである点を強調する

では、この意味での「新心理学」、つまり科学的・実験心理学を、わが国にもたらした現在の心理学の開祖に当たる人物とは誰か。その人物とは、外国での学びを経てわが国に持ち帰ることになった人物を待たねばならなかった。

VI. 新心理学の担い手、元良勇次郎

日本の「新心理学」の担い手となったのは、本論冒頭で述べたように元良（杉田姓から結婚による改姓）勇次郎であることは、現在では明確な事実である。

元良は、1888（明治21）年6月、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学のホール（G. S. Hall）のもとで学位（Ph. D.）を取得し、7月には帰国した。日本で最初の新心理学者である。その師、ホールも、アメリカで最初の心理学学位（Ph. D. in Psychology）をハーバード大学で、W. ジェームズ（アメリカ、プラグマティズム哲学の代表的人物でもある）の指導の下、取得した人物である（ハーバード大学が授与した全学位授与者の中の第18番目にあたる）。

帰国した元良は、その年の10月には、当時の帝国大学の講師に就任し、「精神物理学」を担当した。この担当科目は、これはいうまでもなくフェヒナーによる精神物理学をさすが、元良の担当した具体的な内容は、当人の講義申告記録にあるように、まさしく現在に通じる「心理学実験・実習」に当たるものである。

そして、2年後、1890年、帝国大学の正教授に就任し、以降、日本に心理学を定着させ、心理学実験室の開設など、心理学を広く展開し、弟子の育成や社会的ニーズを始め多くの使命の遂行などにも大きな足跡を残した。しかし、病を得て、現職のまま死去した。時に大正2年のことであった（元良の経歴、年譜などをはじめ関係する人々や事柄に関する詳細などは、別途多くの文献があるのでそれを参照のこと（例えば、

荒川、2000、小泉、2004、西川、1995a、b、1997、1998、2001a、b、2006、Nishikawa、2005、西川・高砂、2005、佐藤、2002、佐藤・溝口、1997、など））。必要最小限のことは、重複をいとわず以下にも言及することにする。

以下、本論の趣旨に即して、津田仙と元良勇次郎、あるいは両者に直接関係する人物たちとの関係や事項に限定して言及する。

なお、津田仙に関する詳細は、例えば、小泉（2004）、都田（1972）、高橋（2008）、山崎（1962）などを参照のこと。

以下の略年表の形で、津田仙を紹介し、その間の、元良勇次郎との出会いと接点の出来事を重ねて示す（表3、を参照のこと）。

津田が開設した学農社農学校の教員として、昔からの津田と新島襄との関係から、新島の同志社英学校終了者であった、最初に中島力造、そして中島の留学による辞任の後任として、元良勇次郎らが教員として雇用されたことに始まる。その後、津田が開設に関わった、耕教学舎の経営者ならびに教員として参加したりしている。この学舎は、後、東京英学校、東京英和学校と改称され、現在の青山学院大学などの前身となるものである。そこでの関わりはわずかな期間であったようであるが、すぐに元良も、アメリカ留学に旅立った（これらについては、荒川、2000、小泉、2004、などに詳しい）。その最初の行き先は、ボストン大学であったが、ジョンズ・ホプキンス大学に転じ、ホールのもと、幅広く学び最終的には心理学ならびにその関連分野を含み、Ph. D.学位を取得し、その直後帰国する。その後の元良の果たした役割は、繰り返すまでもないだろう。

帰国後の元良は、しばらく当時の青山学院と関係を有していたが、結局、東京大学正教授となった。その後も両者の間にはいろいろな機会に関係があったようであるが、青山学院での心理学担当者となることも、また一方の出身である同志社において、同じく心理学の担当者となることもなかった。

ことに、青山では、元良のもたらした新心理学（つまり、科学的心理学・実験心理学）、その専門とした精神物理学（生理学、物理学、数学を背景とする）を始め、ダーウインの進化論をめぐって、宗教家との間に何らかの軋轢があったといわれている。この点は、アメリカでの学びである当初のボストン大学からジョンズ・ホプキンス大学への転学に当たった理由の一つともみなされている。もともと同志社での学びでも、中でも数学や物理学を自学自習していたことも知られている。

VII. おわりに

以上、幕末から、明治新政府成立にともなう開明・洋化の時代潮流の中において、「心理学」という学問が、いかに日本の風土の中に移入され定着し拡充して

いったのか、その位置づけに欠かせなかった当時の公的・私教育制度史の変遷に重ね、また心理学の設立前夜から夜明けに至る経緯やその役割を担った先達たちに焦点を合わせ、いくつかの論点の究明を試みた。取り上げた人物は、当時の佐倉（現、千葉県佐倉市）藩士西村茂樹、津田仙を中心に、これらの人物が織り成した人物交流の中で、大きな役割を担ったときの代表的な人物たち、とくに、心理学との絡みでいうと、西周をすえた。

今あるような心理学はなぜそのようなものか、その発端を近い過去に求めても、その解明には多くの資料を必要とするが、その多くは失われているといっても過言ではない。この点で、わが国固有の貴重な史料の保管・維持・管理への提言も欠かせない。いわゆる、アーカイブズの設立が急務である。あいにく、世界でもその数は限られているが、アメリカのアクロン大学のアメリカ心理学史アーカイブズは、最大規模を誇るだけでなく、日本関係の史料の貴重な保管場所でもある。この他に、アメリカには、各財団の有するアーカイブズ（例えば、ロックフェラー・アーカイブズなど）も貴重である。ぜひわが国においてもこうしたアーカイブズの設立を祈願したい。

一方、本論冒頭でも指摘したが、現状を見ると、心理学は、社会的現象であるとさえ言ってもよいだろう。もちろん、その存在を理解されなかったり、また無視されたり否定されるより、この学問分野に身を置くものとして喜ばしいことであるが、しかし、その役割と意義を十二分に果たすに当たって、過大な期待や外的なニーズには、あいにく対応できないことも知ってほしい。

繰り返すと、そもそも心理学とは、なんであって、なんでないのか、など過不足なく承知いただきたい。ことに心理学における基本性格を、科学的・実験心理学と知って、過剰な拒否反応を示す方も多い。そこから派生して、数などで、心が分かるかなどともいわれよう。

こうした日常常識や各自の経験や直観によって、科学的心理学の学びは、その当初にあった取り組みへの意欲にもかかわらず、結果として失望に終わったり、反発に終始したりなど、思わざる弊害を生んでもいる。

こうした問題をすべて解消することは困難であろうが、ひとつの大事な取り組みは、心理学の成り立ちとその後の展開と経緯、また心理学における心観、心の捉え方、考え方、方法論など、いわゆる学問を支える研究者の間で共有される基本的な「パラダイム」をきちんと理解することであろう。そのさい、心理学史が、大きな役割と機能を果たしていることを知ってほしい。したがって、心理学史を、単なる過去への後退としてではなく、現在を知り、将来への展望を得るうえで、基本的に欠かせない学びであることを知ってほしいと考える。

この点は、心理学の初学者や入門者にとどまらず、

むしろ心理学の専門家、研究者にも等しく指摘したいことである。

引用文献

- 荒川歩 2000 ジョンズ・ホプキンス大学入学以前の元良 勇次郎。心理学史・心理学論誌、2、17-23。
- 木村礎・藤野保・村上直編 1989 藩史大事典 第2巻 関東編。雄山閣。木村礎 佐倉藩。P.452-474。
- 小泉晋一 2004 青山学院における大学設立までの心理学教育の歴史。心理学史・心理学論、6、1-11。
- 松平直亮編 1894 西村茂樹先生論説集、第1巻。大学の中に聖学の一科を設くべき説。P.163-166。性善説。P.169-175。国立国会図書館近代デジタルライブラリー所収。
- 都田豊三郎 1972 津田仙—明治の基督者—。非売品。(社)日本心理学会編 2003 日本心理学会75年史。日本心理学会。
- 西川泰夫 1995a 「大学心理学」をもたらした二人の日本人—世界の心理学との出会い—。上智大学心理学年報、19、1-8。
- 西川泰夫 1995b 「心理学」、学名の由来と語源をめぐって—サイコロジーは心理学か—。基礎心理学研究、14(1)、9-21。
- 西川泰夫 1997 「日本の心理学史」保存への問題提起—今あるような心理学はなぜそのようなものか—。科学基礎論研究、24(1)、23-29。
- 西川泰夫 1998 「心理学」という学名の起源—メンタル・フィロソフィーかサイコロジーか—。科学基礎論研究、26(1)、17-22。
- 西川泰夫(研究組織代表) 2001a 日本の現代心理学形成にかかわる学問史的検討。平成10年度～平成12年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書。
- 西川泰夫 2001b わが国への心理学の受容と定着過程を担った先達たち—外国留学、並びにわが国の教育機関との関わりから—。心理学評論、44(4)、441-465。
- 西川泰夫・高砂美樹 2005 心理学史。(財)放送大学教育振興会。
- Nishikawa, Y. 2005 An overview of the history of psychology in Japan and the background to the development of the Japanese Psychological Association. Japanese Psychological Research, 47(2), 63-72。
- 西川泰夫(研究組織代表) 2006 日本の心理学史に関わる海外資料収集調査研究。平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書。
- 西村茂樹 1885 心学講義1、2、3、4、5。物外廬蔵版。
- 国立国会図書館近代デジタルライブラリー所収。
- 大久保利謙編 1960 西周全集。第1巻。宗高書房。
- 大久保利謙編 1962 西周全集。第2巻。宗高書房。
- 大久保利謙編 1966 西周全集。第3巻。宗高書房。
- 大久保利謙編 1981 西周全集。第4巻。宗高書房。
- 大久保利謙 2007 明六社。講談社学術文庫。
- 佐藤達哉 2002 日本における心理学の受容と展開。北大路書房。
- 佐藤達哉・溝口元 1997 通史 日本の心理学。北大路書房。
- 高橋昌郎 1987 西村茂樹。吉川弘文館。
- 高橋宗司 2008 津田仙評伝。草風館。
- 山崎孝子 1962 津田梅子。吉川弘文館。

(2008年7月15日受理)